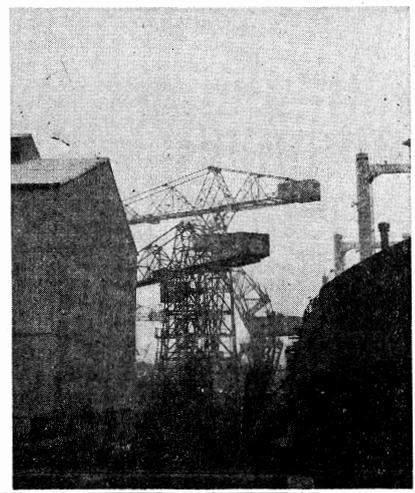


全造船 石川島分会の教訓

石川島の全造船脱退をめぐる攻防戦は、11月23日、全造船機械石川島分会の旗を守る部分で臨時大会を開いて正式に体制を再建し、同日、船用ボラス日共が脱退修正決議案を行ない「石川島労働者同盟」と名称変更したことで一役目を終り、「分属下の闘い」の第2ラウンドに入った。川崎重工も12月1日全造船脱退を通告、攻防は12月25日一般投票の名目で行なわれ(石川島労働者同盟)を最後の本戦と見られる。石川島を離脱する今回の一連の全造船脱退は、各組合内での闘いに止まらず、造船機械労働者同盟の南進主義の再編を実現する攻撃の中心であった。この攻撃は、70年代日本労働運動のありかたをめぐり長期にわたる歴史的な闘いをつづけて、日本の歴史的な闘い、民主的分野、反戦派の飛躍という新しい対立をつくりだした。戦後20年における民間企業労働組合が歴史的に動向を占める中で、大企業労働組合の巨大工場において、戦後の労働者同盟に闘うべきかという重大な問題と、この攻防戦は関係している。社民との統一戦線の上で、すでにその道を数年前から歩んでいいる三東の左派・組合の指導権を保持する中小造船と共に、激大な使用人の組織と対峙することは異例以上に至難の闘いである。本文は、その闘いをつづけて、分会の再建までの段階での中国船協の試論である(写真：東京豊洲にある石川島造船第二工場(造船所))



石川島の全造船脱退をめぐる攻防戦は、11月23日、全造船機械石川島分会の旗を守る部分で臨時大会を開いて正式に体制を再建し、同日、船用ボラス日共が脱退修正決議案を行ない「石川島労働者同盟」と名称変更したことで一役目を終り、「分属下の闘い」の第2ラウンドに入った。川崎重工も12月1日全造船脱退を通告、攻防は12月25日一般投票の名目で行なわれ(石川島労働者同盟)を最後の本戦と見られる。石川島を離脱する今回の一連の全造船脱退は、各組合内での闘いに止まらず、造船機械労働者同盟の南進主義の再編を実現する攻撃の中心であった。この攻撃は、70年代日本労働運動のありかたをめぐり長期にわたる歴史的な闘いをつづけて、日本の歴史的な闘い、民主的分野、反戦派の飛躍という新しい対立をつくりだした。戦後20年における民間企業労働組合が歴史的に動向を占める中で、大企業労働組合の巨大工場において、戦後の労働者同盟に闘うべきかという重大な問題と、この攻防戦は関係している。社民との統一戦線の上で、すでにその道を数年前から歩んでいいる三東の左派・組合の指導権を保持する中小造船と共に、激大な使用人の組織と対峙することは異例以上に至難の闘いである。本文は、その闘いをつづけて、分会の再建までの段階での中国船協の試論である(写真：東京豊洲にある石川島造船第二工場(造船所))

一、経過と展望

不可能を可能とした反戦派

全造船の脱退は、石川島分会の再建をめぐって、不可能を可能とした。石川島分会は、11月23日、臨時大会を開いて正式に体制を再建し、同日、船用ボラス日共が脱退修正決議案を行ない「石川島労働者同盟」と名称変更したことで一役目を終り、「分属下の闘い」の第2ラウンドに入った。川崎重工も12月1日全造船脱退を通告、攻防は12月25日一般投票の名目で行なわれ(石川島労働者同盟)を最後の本戦と見られる。石川島を離脱する今回の一連の全造船脱退は、各組合内での闘いに止まらず、造船機械労働者同盟の南進主義の再編を実現する攻撃の中心であった。この攻撃は、70年代日本労働運動のありかたをめぐり長期にわたる歴史的な闘いをつづけて、日本の歴史的な闘い、民主的分野、反戦派の飛躍という新しい対立をつくりだした。戦後20年における民間企業労働組合が歴史的に動向を占める中で、大企業労働組合の巨大工場において、戦後の労働者同盟に闘うべきかという重大な問題と、この攻防戦は関係している。社民との統一戦線の上で、すでにその道を数年前から歩んでいいる三東の左派・組合の指導権を保持する中小造船と共に、激大な使用人の組織と対峙することは異例以上に至難の闘いである。本文は、その闘いをつづけて、分会の再建までの段階での中国船協の試論である(写真：東京豊洲にある石川島造船第二工場(造船所))

二、攻撃の本質と全造船の労働者支配に抗して

全造船の脱退は、石川島分会の再建をめぐって、不可能を可能とした。石川島分会は、11月23日、臨時大会を開いて正式に体制を再建し、同日、船用ボラス日共が脱退修正決議案を行ない「石川島労働者同盟」と名称変更したことで一役目を終り、「分属下の闘い」の第2ラウンドに入った。川崎重工も12月1日全造船脱退を通告、攻防は12月25日一般投票の名目で行なわれ(石川島労働者同盟)を最後の本戦と見られる。石川島を離脱する今回の一連の全造船脱退は、各組合内での闘いに止まらず、造船機械労働者同盟の南進主義の再編を実現する攻撃の中心であった。この攻撃は、70年代日本労働運動のありかたをめぐり長期にわたる歴史的な闘いをつづけて、日本の歴史的な闘い、民主的分野、反戦派の飛躍という新しい対立をつくりだした。戦後20年における民間企業労働組合が歴史的に動向を占める中で、大企業労働組合の巨大工場において、戦後の労働者同盟に闘うべきかという重大な問題と、この攻防戦は関係している。社民との統一戦線の上で、すでにその道を数年前から歩んでいいる三東の左派・組合の指導権を保持する中小造船と共に、激大な使用人の組織と対峙することは異例以上に至難の闘いである。本文は、その闘いをつづけて、分会の再建までの段階での中国船協の試論である(写真：東京豊洲にある石川島造船第二工場(造船所))

同盟支配打倒の展望と民間基幹産業における反戦派の任務

全造船の脱退は、石川島分会の再建をめぐって、不可能を可能とした。石川島分会は、11月23日、臨時大会を開いて正式に体制を再建し、同日、船用ボラス日共が脱退修正決議案を行ない「石川島労働者同盟」と名称変更したことで一役目を終り、「分属下の闘い」の第2ラウンドに入った。川崎重工も12月1日全造船脱退を通告、攻防は12月25日一般投票の名目で行なわれ(石川島労働者同盟)を最後の本戦と見られる。石川島を離脱する今回の一連の全造船脱退は、各組合内での闘いに止まらず、造船機械労働者同盟の南進主義の再編を実現する攻撃の中心であった。この攻撃は、70年代日本労働運動のありかたをめぐり長期にわたる歴史的な闘いをつづけて、日本の歴史的な闘い、民主的分野、反戦派の飛躍という新しい対立をつくりだした。戦後20年における民間企業労働組合が歴史的に動向を占める中で、大企業労働組合の巨大工場において、戦後の労働者同盟に闘うべきかという重大な問題と、この攻防戦は関係している。社民との統一戦線の上で、すでにその道を数年前から歩んでいいる三東の左派・組合の指導権を保持する中小造船と共に、激大な使用人の組織と対峙することは異例以上に至難の闘いである。本文は、その闘いをつづけて、分会の再建までの段階での中国船協の試論である(写真：東京豊洲にある石川島造船第二工場(造船所))

三、日共は同盟へ

四一七以来の歴史的裏切り

全造船の脱退は、石川島分会の再建をめぐって、不可能を可能とした。石川島分会は、11月23日、臨時大会を開いて正式に体制を再建し、同日、船用ボラス日共が脱退修正決議案を行ない「石川島労働者同盟」と名称変更したことで一役目を終り、「分属下の闘い」の第2ラウンドに入った。川崎重工も12月1日全造船脱退を通告、攻防は12月25日一般投票の名目で行なわれ(石川島労働者同盟)を最後の本戦と見られる。石川島を離脱する今回の一連の全造船脱退は、各組合内での闘いに止まらず、造船機械労働者同盟の南進主義の再編を実現する攻撃の中心であった。この攻撃は、70年代日本労働運動のありかたをめぐり長期にわたる歴史的な闘いをつづけて、日本の歴史的な闘い、民主的分野、反戦派の飛躍という新しい対立をつくりだした。戦後20年における民間企業労働組合が歴史的に動向を占める中で、大企業労働組合の巨大工場において、戦後の労働者同盟に闘うべきかという重大な問題と、この攻防戦は関係している。社民との統一戦線の上で、すでにその道を数年前から歩んでいいる三東の左派・組合の指導権を保持する中小造船と共に、激大な使用人の組織と対峙することは異例以上に至難の闘いである。本文は、その闘いをつづけて、分会の再建までの段階での中国船協の試論である(写真：東京豊洲にある石川島造船第二工場(造船所))

四、日共は同盟へ

四一七以来の歴史的裏切り

全造船の脱退は、石川島分会の再建をめぐって、不可能を可能とした。石川島分会は、11月23日、臨時大会を開いて正式に体制を再建し、同日、船用ボラス日共が脱退修正決議案を行ない「石川島労働者同盟」と名称変更したことで一役目を終り、「分属下の闘い」の第2ラウンドに入った。川崎重工も12月1日全造船脱退を通告、攻防は12月25日一般投票の名目で行なわれ(石川島労働者同盟)を最後の本戦と見られる。石川島を離脱する今回の一連の全造船脱退は、各組合内での闘いに止まらず、造船機械労働者同盟の南進主義の再編を実現する攻撃の中心であった。この攻撃は、70年代日本労働運動のありかたをめぐり長期にわたる歴史的な闘いをつづけて、日本の歴史的な闘い、民主的分野、反戦派の飛躍という新しい対立をつくりだした。戦後20年における民間企業労働組合が歴史的に動向を占める中で、大企業労働組合の巨大工場において、戦後の労働者同盟に闘うべきかという重大な問題と、この攻防戦は関係している。社民との統一戦線の上で、すでにその道を数年前から歩んでいいる三東の左派・組合の指導権を保持する中小造船と共に、激大な使用人の組織と対峙することは異例以上に至難の闘いである。本文は、その闘いをつづけて、分会の再建までの段階での中国船協の試論である(写真：東京豊洲にある石川島造船第二工場(造船所))

目次

- 一、経過と展望
- 二、攻撃の本質と全造船の労働者支配に抗して
- 三、日共は同盟へ
- 四、反戦派の飛躍
- 五、闘いの展望

五、闘いの展望

全造船の脱退は、石川島分会の再建をめぐって、不可能を可能とした。石川島分会は、11月23日、臨時大会を開いて正式に体制を再建し、同日、船用ボラス日共が脱退修正決議案を行ない「石川島労働者同盟」と名称変更したことで一役目を終り、「分属下の闘い」の第2ラウンドに入った。川崎重工も12月1日全造船脱退を通告、攻防は12月25日一般投票の名目で行なわれ(石川島労働者同盟)を最後の本戦と見られる。石川島を離脱する今回の一連の全造船脱退は、各組合内での闘いに止まらず、造船機械労働者同盟の南進主義の再編を実現する攻撃の中心であった。この攻撃は、70年代日本労働運動のありかたをめぐり長期にわたる歴史的な闘いをつづけて、日本の歴史的な闘い、民主的分野、反戦派の飛躍という新しい対立をつくりだした。戦後20年における民間企業労働組合が歴史的に動向を占める中で、大企業労働組合の巨大工場において、戦後の労働者同盟に闘うべきかという重大な問題と、この攻防戦は関係している。社民との統一戦線の上で、すでにその道を数年前から歩んでいいる三東の左派・組合の指導権を保持する中小造船と共に、激大な使用人の組織と対峙することは異例以上に至難の闘いである。本文は、その闘いをつづけて、分会の再建までの段階での中国船協の試論である(写真：東京豊洲にある石川島造船第二工場(造船所))

六、闘いの展望

全造船の脱退は、石川島分会の再建をめぐって、不可能を可能とした。石川島分会は、11月23日、臨時大会を開いて正式に体制を再建し、同日、船用ボラス日共が脱退修正決議案を行ない「石川島労働者同盟」と名称変更したことで一役目を終り、「分属下の闘い」の第2ラウンドに入った。川崎重工も12月1日全造船脱退を通告、攻防は12月25日一般投票の名目で行なわれ(石川島労働者同盟)を最後の本戦と見られる。石川島を離脱する今回の一連の全造船脱退は、各組合内での闘いに止まらず、造船機械労働者同盟の南進主義の再編を実現する攻撃の中心であった。この攻撃は、70年代日本労働運動のありかたをめぐり長期にわたる歴史的な闘いをつづけて、日本の歴史的な闘い、民主的分野、反戦派の飛躍という新しい対立をつくりだした。戦後20年における民間企業労働組合が歴史的に動向を占める中で、大企業労働組合の巨大工場において、戦後の労働者同盟に闘うべきかという重大な問題と、この攻防戦は関係している。社民との統一戦線の上で、すでにその道を数年前から歩んでいいる三東の左派・組合の指導権を保持する中小造船と共に、激大な使用人の組織と対峙することは異例以上に至難の闘いである。本文は、その闘いをつづけて、分会の再建までの段階での中国船協の試論である(写真：東京豊洲にある石川島造船第二工場(造船所))

破防法研究

9号 200円(50)

アジア侵略への全面的再編成
七〇年代の日本の政治・社会 陶山健一
日帝のアジア侵略を阻止する労働運動を
中心に代表者選定

里塚・激闘の三日間
日本農民の新天地 戸村一作
日本全農の峰起を詠える 葉山岳夫
階級闘争の提点と構想 宮岡政雄
三里塚の闘いに連帯する 鎌田敬幸
資料・公共用地の取得に関する特別措置法(抜粋)
小西裁判と隊友反戦結成の意味そのもの
法務省は在日朝鮮人の国籍書換を無条件で認めよ

破防法公判傍聴記(一) 浅田光輝
破防法公判傍聴記(二) 赤軍派・井上正治
破防法公判傍聴記(三) 浅田光輝
破防法公判傍聴記(四) 浅田光輝
破防法公判傍聴記(五) 浅田光輝
破防法公判傍聴記(六) 浅田光輝
破防法公判傍聴記(七) 浅田光輝
破防法公判傍聴記(八) 浅田光輝
破防法公判傍聴記(九) 浅田光輝
破防法公判傍聴記(十) 浅田光輝

破防法研究会
東京都港区新橋2-8-11
小長井法律事務所 電話 03-3542-6666

帝国主義的民族主義

へ転落した革マル派

(下)

三帝国主義的民族主義 義への転落

「民族主義」は、国家の統一と発展のために必要不可欠なものである。しかし、それが帝国主義的になると、民族間の対立を生じ、世界を混沌とさせる。我々革マル派は、この危険な道から転落し、民族主義の真の意義を追求する必要がある。

民族主義の歴史は、常に国家の興亡と密接に関連している。古代のローマ帝国から近代のナポレオン戦争まで、民族主義は国家の統一と発展の原動力となってきた。しかし、同時に、それは民族間の対立と戦争の根源ともなってきた。

我々革マル派は、この歴史を振り返り、民族主義の真の意義を追求する必要がある。それは、単なる国家の利益を守るためではなく、民族の解放と発展のためである。

A 民族的抑圧の否定 とその理論的問題

民族主義の理論は、民族的抑圧の否定を前提としている。これは、民族間の平等と相互尊重を主張するものである。しかし、この理論にはいくつかの問題がある。

第一、民族的抑圧の概念が曖昧である。どの民族が抑圧されているのか、抑圧の程度はどのくらいなのか、といった点で明確さが欠けている。

第二、民族主義が、民族的抑圧の否定を主張する一方で、同時に民族的優越性を主張している点である。これは、理論的に矛盾を生んでいる。

民族解放闘争を罵倒し帝 国主義的民族主義へ転落

秋口純

B 民族解放闘争を 罵倒

民族解放闘争は、民族の自由と独立を達成するための必要手段である。しかし、我々革マル派は、この闘争を罵倒し、帝国主義的民族主義へと転落している。

我々の批判は、民族解放闘争の目的と手段の両方に向けられている。我々は、民族の解放を目的とするのではなく、国家の利益を守ることを目的としている。また、暴力闘争を手段とするのではなく、平和的手段を重視している。

この転落は、我々の政治的立場を大きく変えている。我々は、民族主義の真の意義を追求するのではなく、国家の利益を守ることに注力している。

民族主義の歴史は、常に国家の興亡と密接に関連している。古代のローマ帝国から近代のナポレオン戦争まで、民族主義は国家の統一と発展の原動力となってきた。しかし、同時に、それは民族間の対立と戦争の根源ともなってきた。

我々革マル派は、この歴史を振り返り、民族主義の真の意義を追求する必要がある。それは、単なる国家の利益を守るためではなく、民族の解放と発展のためである。

C 先進国人民の死活 の任務としての「民 族抑圧反対」の否定

先進国人民の死活は、民族抑圧反対の任務として見なされてきた。しかし、我々革マル派は、この任務を否定している。

我々の見解は、先進国人民の死活は、民族抑圧反対の任務とは関係がない。我々は、民族の解放と発展を目的とするのではなく、国家の利益を守ることを目的としている。

この否定は、我々の政治的立場を大きく変えている。我々は、民族主義の真の意義を追求するのではなく、国家の利益を守ることに注力している。

D 毛沢東主義への 「迎合」

我々革マル派は、毛沢東主義への「迎合」を行っている。これは、我々の政治的立場を大きく変えている。

我々の「迎合」は、毛沢東主義の真の意義を追求するのではなく、国家の利益を守ることを目的としている。我々は、民族主義の真の意義を追求するのではなく、国家の利益を守ることに注力している。

この「迎合」は、我々の政治的立場を大きく変えている。我々は、民族主義の真の意義を追求するのではなく、国家の利益を守ることに注力している。

E 抽象的 革命論の 帰結

抽象的革命論の帰結は、我々の政治的立場を大きく変えている。我々は、民族主義の真の意義を追求するのではなく、国家の利益を守ることに注力している。

我々の抽象的革命論は、民族の解放と発展を目的とするのではなく、国家の利益を守ることを目的としている。我々は、民族主義の真の意義を追求するのではなく、国家の利益を守ることに注力している。

この帰結は、我々の政治的立場を大きく変えている。我々は、民族主義の真の意義を追求するのではなく、国家の利益を守ることに注力している。

F 新丁面四 の帰結

新丁面四の帰結は、我々の政治的立場を大きく変えている。我々は、民族主義の真の意義を追求するのではなく、国家の利益を守ることに注力している。

我々の新丁面四は、民族の解放と発展を目的とするのではなく、国家の利益を守ることを目的としている。我々は、民族主義の真の意義を追求するのではなく、国家の利益を守ることに注力している。

この帰結は、我々の政治的立場を大きく変えている。我々は、民族主義の真の意義を追求するのではなく、国家の利益を守ることに注力している。

